

文化財学習会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 江戸～明治の町屋と寺町を訪ねる

講 師 藤井雄三

(高松市教育委員会文化財課長)

渡邊 誠

(高松市教育委員会文化財専門員)

平成21年5月24日(日)

共 催 高松市歴史民俗協会

高松市教育委員会

1 二番丁小学校

松平頼重の命により水練の指導をした今泉八郎左衛門盛行をはじめ、藩士数人の屋敷跡に建てられました。

南東隅に「水任流流祖之碑」と「水任流の歌碑」が建っていましたが、現在は新設統合校校舎建設工事のため、一時的に撤去されています。

明治三十五年（1902年）四月に開校以来、明治、大正、昭和、平成を経て、平成十三年（2001年）に百周年を迎えました。開校当時は各学年二クラス、在学児童六百二十八名、教員十名、当時小学校は四年制でした。昭和七年（1932年）には学校給食を開始、欠食児童と栄養不良児童救済のため実施されました。

昭和二十年（1945年）に高松空襲のため校舎は全焼しましたが、昭和二十一年（1946年）に新築第一期工事が竣工（六教室）しました。昭和二十二年（1947年）教育基本法学校教育法が公布され、二番丁尋常小学校は高松市立二番丁小学校となりました。昭和三十三年には児童数がピークに達し、教室数四十、児童数千九百九十四名を数えました。現在はクラス数十五、生徒数四百四十九人と減少し、平成二十二年四月、四番丁・日新小学校とともに三校は統合され、新しい小学校に生まれ変わります。

2 二番丁小学校遺跡

二番丁小学校遺跡の所在する範囲は砂堆が広がっており、近世の城下町が築かれる以前から、集落が立地するのに適した安定した地盤が形成されていたと考えられます。今回の調査では、中世から近世初頭（十二世紀後半～十七世紀前半）にかけての集落跡が展開していたことが明らかになりました。

サンポート周辺の発掘調査でも同様な時代の集落跡や港町の状況が明らかにされており、これらの範囲がどの程度まで広がっていたのか、今回の調査も含め、今後の調査成果の蓄積が期待されます。

3 弘憲寺（利剣山遍照院）

本尊 不動明王（重要文化財）

天正十五年（1587年）讃岐に入国した生駒親正は島田寺（丸亀市飯山町）の良純に帰依し、鵜足郡にあった法勲寺が廃寺となり本尊、靈宝を近くにある島田寺に移したことから法勲寺を再興し、良純に寺務を執らせました。

慶長八年（1603年）七十八歳の高齢で生駒親正は高松城内で死去し、親正の子一正は、法勲寺を父の菩提を弔うため親正の塚上に移すとともに、生駒親正の法名（海依弘憲

大禪定門）から弘憲寺と改称させました。

弘憲寺には多くの寺宝が残っており、鑄銅製で鍍金を加えた金剛盤など密教法具一式（国指定重要文化財）は東京国立博物館に收藏されています。本堂の前に大きな岩があります。昔、二代目住職宥遍上人の怪力の噂を聞いた魔物が力を試そうと投げ込んだ岩を、宥遍上人は瞬時に投げ返したと言われていました。宥遍上人は高野山浄菩提院の住職でした。嵯峨大覚寺法親王が高野山に遊学した時、宥遍上人を師と仰ぎ、これを縁として寛永十三年（1636年）に上人号を授かりました。法親王は後水尾天皇の皇子だったことから、宥遍上人は天皇から七條袈裟を賜っています。寛文五年（1665年）大覚寺法親王の命により、大覚寺の末寺となり、弘憲寺は讃岐の



弘 憲 寺 本 堂

触頭ふれがしらとも呼ばれました。

なお、鳥羽伏見の戦い（慶応四年 1868年）で朝敵事件の責任を負った二家老のうち、小河又右衛門久成が切腹した場所でもあります。

《触頭》 ふれがしら

江戸時代、寺院・神社のなかから選定され、寺社奉行から出る命令の伝達や、寺社から出る訴訟の取次ぎにあたった神社や寺院のこと。

《二家老》 小夫兵庫正容と小河又衛門久成

小夫兵庫正容（四十三歳） 文久三年（1863年）家老となり、鳥羽伏見の戦いの際、官軍に発砲し朝敵となりました。朝敵事件の責任をとり、正覚寺で切腹し藩難に殉じました。

小河又衛門久成（二十七歳） 文・武・書の道を治め、慶応二年（1866年）家老となりました。小夫兵庫正容とともに朝敵事件の責任をとり、檀那寺弘憲寺で切腹しました。

【山門】

明和三年（1766年）に建立されました。扁額は沙門南国の筆によるものです。



石力試上人遍宥

【弁天堂】

弘憲寺の鎮守社で、本尊は一面六臂（一つの顔と6本の腕を持つ）の弁財天、脇に十五童子を配しています。

【平和の塔】

庵治石で造られ、高さ十六m土台は八畳敷、石の五重の塔としては日本最大のもので、戦争犠牲者の慰霊塔として、平和祈願のため昭和二十五年に建てられました。

【生駒親正墓所】（県 史跡）

本堂裏には生駒親正夫妻の墓所があり、大型の五輪塔が二基建っています。昭和三十年、香川県史跡に指定されました。親正の五輪塔は高さ三・〇メートルで夫人の塔は高さ二・九〇メートル、それぞれ基壇の上に建っています。この五輪塔は豊島石（角礫質凝灰岩）といわれる石で、どちらも地輪（基礎）の前面に、親正の墓には「海依弘憲大弾定門出離生死而已 時慶長十四己酉年九月吉日 孝子讃岐当国主敬白」、夫人の墓には「奉華溪宗鮮大姉 干時慶長十四年讃岐守一正欽敬白」という刻銘があったそうですが、風化しやすい石の性質から、今は剥落消滅しています。



生駒親正墓所

さるれおう
【讃留靈王神社の祠】

弘憲寺の南西の隅に讃留靈王神社の祠があります。元は法勲寺にありました。

《讃留靈王の伝説》

景行天皇の頃、土佐の海に大魚が現れて、船や人を襲い暴れていました。それを知った景行

天皇は日本武尊（ヤマトタケルノミコト）の子、

れいし

靈子（武彥王・タケカイコオウ）に悪魚退治を命じます。悪魚退治を命じられた靈子はさつ

れいし

そく土佐に向かいますが、大魚は讃岐の国（香川県）へ移動していました。大魚を追いかけ讃岐にやってきた靈子は、船と兵士を集め大魚との戦に備えます。いよいよ戦は始まり

ましたが、瀬戸内海を自在に泳ぎ回る大魚に、靈子の乗った軍船は飲み込まれてしまいました。靈子は何とか大魚の腹の中から脱出する方法を考え、軍船に火をつけることを思い付きました。火に焼かれてもがき苦しむ大魚の腹を切り裂いて、脱出し大魚を退治します。

景行天皇に大魚退治を認められた靈子は、讃岐の土地を与えられ、城山に館を構え、讃留靈王（讃岐に留まる靈王）となります。讃留靈王（靈子）は、晩年新しく館を建てる場所



讃留靈王神社祠

を探し、城山から矢を放ちました。矢が突きたったのは、古代寺院の法勲寺と伝えられています。その後、讃留霊王は百二十四歳まで長生きし、その亡骸は現讃留霊王神社境内（丸亀市飯山町）にある讃留霊王古墳に葬られたと言われています。

【庭園】

客殿北側に展開する庭園は、瀬戸内海を借景したことで知られています。（現在海は見えません）低い築山の裾を沿うように西から東に細長い池が穿たれ、築山には瀧の石組みが組まれています。瀧の水は落ちてはいませんが、かつては上手に池があり、これを水源にしたと言われています。

はびきくるま

【波引車紋】

生駒家の紋である波引車紋は弘憲寺の紋でもあります。

生駒家の由来を記述した『讃羽綴遺録』によると、生駒家は家紋として「三亀甲」と「丸車」を併用していましたが、豊臣秀吉の朝鮮出兵の渡海時に陣幕が半分海に浸かり、「丸車」が半分に見えました。その時の戦いで戦功があったため、以後半分になった車の形を家紋とし、「波引車」と呼ぶようになりました。

なお、平成二十年度史跡高松城跡天守台石垣解体修理工事に伴い発掘調査を実施した際、

天守台南西隅の堀底を掘削中に装飾用の瓦が出土しました。瓦の表面に車輪を半分にした形で「波引車」の家紋を貼り付けています。家紋の細部は簡略化されており、大きさは縦約10cm×横約16cm×高さ約2cmです。発掘調査において生駒家家紋瓦の出土は初めてで、同じ生駒氏によつて築城された丸亀城・引田城などでの出土例もありません。出土位置から生駒期の天守に使用されていた可能性が高いと考えられています。



4 錦町・扇町の町並み

弘憲寺のある錦町一帯は城下町の通りをよく残しています。通りがまっすぐに通っていないため、敵の攻撃に対して防御の役目を担っていました。

城下から西に続く丸亀街道に沿って扇町（西通り町・木蔵町と呼ばれていた）があり、戦災を受けなかったため、様々な時代の町屋がいまだに存在します。江戸末期から明治初期に建てられた増井家住宅・笠井家住宅・恵比寿神社、大正時代に建てられた岡田家住宅・鳥飼家住宅など各時代の建築を見ることができます。

平成十八年八月、神奈川大学西研究室・東海大学小沢研究室による「高松市扇町地区町並み調査報告書」の文を左記に掲載しています

【増井家住宅西棟】

通りの南側の敷地に北向きに建ち、表から主屋、坪庭、付属棟が並ぶ。

主屋は間口三間半、奥行五間、木造、厨子二階建、切妻屋根、本瓦葺、平入、外壁および垂木を漆喰で塗り込める。
一階正面に本瓦葺の庇^{ひさし}を設け、東側に入り口、西側には持ち送りで支えられる出格子を付ける。

壁は黒漆喰塗で、下部に下見板を張る。二階正面は黒漆喰の塗込めで、虫籠窓を二つ設ける。内部は通り庭形式で、この平面構成は、地域の特色をよく示している。

設計基準尺は一間を六尺三寸とする内法設計である。大黒柱は南北方向六尺七寸、東西方向六尺四寸という立派なものである。建物南側に廊下^{うちり}があり、東側の建物に通じている。この廊下は、当初は縁だったと思われるが、現在は付属



増 井 邸

棟との繋ぎの空間となっている。付属棟は木造、二階建、切妻屋根、瓦葺、内部に改修が見られるが、構造などは当初のものである。建物の西側に六畳の間があり、南側に幅一間の押入がある。

この押入は、押入内部を三つの空間に分けて、上下段をこの部屋が、中段は奥の座敷から使う。座敷は幅約四尺の床、天袋と地袋を持つ棚、幅一間の付書院があり、長押を廻し、天井は竿縁天井。建築年代は、後当主のご教示によると主屋が明治四十年、付属棟が昭和二十三年とのことで、様式・手法から見てもその頃のものとして矛盾しない。主屋・付属棟ともに、扇町地区の特徴をよく示し、歴史的背景を知ることが出来る点で大変興味深い。

《内法設計》
うちのり

部材の一方の内側からもう一方の内側までの寸法を基準として定める寸法の取り方の一つ。

【増井家住宅東棟】

主屋は間口八間、奥行五間、木造、厨子二階建、塗屋造、屋根切妻造、平入、本瓦葺で、一階正面に庇をつける。東側は、近年改修されている。今回は西半分のみ調査を行った。西側には、表から八畳の部屋、十畳の座敷があり、八畳の間の南側に、西側の建物の土間から入口がある。十畳の座敷には、西側に幅一間半の大きな床があり、脇には幅一間の棚、

幅一間の付書院がある。床柱の材は、杉のしぼり丸太の面皮柱。めんかわ

十畳の座敷の奥に幅半間の座敷の奥に幅半間の縁を廻し、石庭に面している。改修されているが、構造はもちろん、大變

作りの凝った構成が見られ、興味深い。建築年代は、御当主のご教示によると明治元年の登記簿に記載されているという。

様式・手法から見ても江戸末期まで遡ると見てよい。

付属棟は、木造、平屋建で、南側に庇をつける。西側に幅の狭い縁を廻し、西側に三室を並べ、南側の西面に茶室をつ

ける。八畳の部屋には幅半間、奥行一尺五寸の床がある。脇床は、障子の開口部となっている。南面は、四枚を一体的にデザインした襖で、上部に竹の節欄間がある。四畳の間は

西側は障子、他の三面は八畳の間と同じデザインの襖。丸窓を用いるなど、八畳の間よりも、数奇屋の要素が多い。天井は竿縁天井。さおぶちてんじょう 六畳の部屋は、西南の隅に水屋がある。縁は、

北側一間分は主屋の縁よりも幅の狭い板、南側は竹縁である。全体的に茶室に向かうにしたがって徐々に数奇屋すきやの要素が濃くなっている。

茶室は、西側に幅五尺の床があり、天井は掛込天井かけこみてんじょうで、東側半間は網代天井あじろである。東面に給仕口がある。南面には二枚仕立ての障子があり、障子の外に竹の格子と蔀戸しらみどをつけ



増井邸 書院

る。西面に、にじり口がある。付属棟の建築年代は、御当主の御教示によると、明治四十五年である。石庭や付属棟の建具などは京都東福寺の石庭などを手がけた庭園作家しげもりみれい重森三玲氏が、昭和の三十年頃に設計したもので、氏の著書「日本庭園史大系」に掲載されている。

《竿縁天井》
さおぶちてんじょう

竿縁（棹縁）と呼ばれる細い角材を一定間隔（三十ｃｍ～五十ｃｍ）で並べ、その上に天井板を張ったもの。天井下地の簡略化、軽量化が図れるために和室の天井に用いられる。

《掛込天井》
かけこみてんじょう

平天井と化粧屋根裏天井で、構成される形式のことで、おもに茶室に用いられる。化粧屋根裏天井とは、小屋組をそのまま化粧材として使っているもの。

《重森三玲》
しげもりみれい

岡山県上房郡賀陽町吉川（現・加賀郡吉備中央町吉川）の生まれ。日本美術学校で日本画を学ぶ。その後は日本庭園を独学で学び、昭和十一年（1



増井邸 茶室

936年）より全国の庭園を実測調査し、全国五百箇所にさまざまな時代の名庭実測、古庭園の調査などにより、研究家として日本庭園史のさきがけとなる。京都東福寺 方丈庭園や志度寺 無染庭など数々の名園を手がける。

【笠井家住宅】

江戸末期から明治初期の建築。二十年ほど前に一階正面の開口部等を改造しているが、昭和十年頃の古写真によれば、出格子が長く続く外観だった。黒漆喰塗の外壁、二階の虫籠窓は現在も踏襲され、また間口六間の規模は旧西浜町の中でもとくに大きく、本来は相應の家格を持つ家であったとうかがえる。

平面は、東寄りに幅の広い通り土間を設け、中央にオイマと台所、ブツマとザシキを二列に置く。土間のみ心々制しんしんせい（七尺七寸）、床上部分は六尺三寸の内法制であるうちのりせい。オイマと台所は近年改造が施されているが、ブツマとサジキはよく当初の様子を残し、ブツマに仏壇を置き、座敷にトコ・タナ・付書院を備える。ブツマは竿縁天井だが、道路から半間の位置に上屋根を見せ、仏壇を置くための押入れの床を一段高く設える。

また、ザシキは良材を用いた端正な造りである。ただし、ブツマの欄間は笠井家の家紋を入れており、笠井家所有後の物である。二階は、小屋組をそのまま見せ、根太天井であるオイマや土間の上部を物置に用いる。小屋組は、ザシキ・ブツマ上部のみ和小屋、土間とオイマ上部は登り梁構造で、これは物置に使用する部分のみ小屋裏が広く取れるのぼりばり登り梁を用いたためと考えられる。また登り梁を受ける地棟木は梁組で支えており、登り梁部分にも梁組が混在する。この小屋組みは外観とも連動し、登り梁を受ける柱は虫籠窓の中央位置に配されており、このため虫籠の格子は中央1本のみ太くなる。外観意匠と構造が合わせて計画されている点に興味深い。主屋背後には、西寄りに便所、その奥に茶室（現存建物は後の新築）があったといい、中庭を「ツボノウチ」と呼んだという。庭には井戸と石敷きの洗い場が残り、当時の生活を窺うことができる。

《心々制》
しんしんせい

心々とは、部材間の距離をあらわす方法のひとつで、部材間の中心から中心までの距離を測ること、またはその距離のことで、心々寸法などとも言われ



笠 井 邸

ている。

《内法制》
うちのりせい

10 ページの内法設計の注を参照。

《登り梁》
のぼりはり

梁自体が水平でなく、屋根勾配などに合わせて斜めに架けられる梁のこと。

【恵比寿神社】

敷地は街道の北側に位置し、本殿は少し奥まっている。当初は通りまですべて境内であったが、現在は住宅が建っている。拝見した資料によると当初は街道から配電・本殿までまっすぐ参道が通り、狛犬、燭台、拝殿、本殿があり、拝殿横に社務所という構成であった。建物は南から拝殿、幣殿、その奥に本殿がある。本殿と幣殿は板塀と仮設屋根で接続している。また稲荷社を拝殿西側に付設する。敷地内には、狛犬、石柱、手水鉢、石灯籠がある。

本殿は、木造、一間社流造、銅板葺。身舎丸柱、切り目長押、内法長押、頭貫木鼻付、出組、向拝角柱、中備龕股、海老紅梁、妻飾紅梁大幣束。正面と側面の三方に縁をつける。建具は正面に棧唐戸。側面および背面は板壁。基壇が高く、また縁高も高いため、棟位置は拝殿と同程度の高さになっている。

幣殿は木造、切妻屋根、棧瓦葺き。拝殿は木造、入母屋造、本瓦葺、平入。桁行三間半、梁間二間。向拝には中備なかぞなえ墓股、虹梁。全体として簡素な造りとなっている。隅棟に花を模した特長的な留蓋瓦がある。正面に縁を付け、壁は板壁。天井は竿縁、床は板敷。内部の壁や開口部は改修されている。

拝殿の西側に付設する稲荷社は、木造、切妻屋根、平入。拝む部分と祀る部分の二室構成である。改修が行われたためか、全体的に新しい材が多く用いられている。聞き取りによると当初の配置は現在と異なっていたという。建築年代を明確に示す資料を欠くが、様式・手法からみて、拝殿は明治期の可能性が高い。本殿はやや時代が下がるようだが、明治から大正期に見ておく。幣殿および稲荷社は、改変が多く年代の特定は困難だが、大正期のものかと思われる。

《一間社流造》ながれ

左右対称で、左右方向には偶数本の柱が配される。母屋の柱は丸柱、向拝は面取角柱で上に舟肘木を載せる。桁行（横に並んだ柱の間）が一間であれば（柱が二本）一間社流造。

《身舎》もや

寢殿造りで、庇ひさしに対し、家屋の主体をなす部分。

《切り目長押》なげし

敷居と縁板の段差部分に取り付けられる長押なげしのこと。

《頭貫木鼻付》かしらぬききばな

木鼻は木端ともあらわされる様に「木の端」を意味している。複数の縦

柱を横に貫ら抜いている柱（頭貫：かしらぬき）や虹梁等の端に付けられた彫刻の事。

《中備墓股》
なかぞんえかえるまた

板墓股の脚内を彫りくぼめて本墓股のように見せたもの。

《向拝》
こうはい

社殿や仏堂で、屋根を正面の階段上に張り出した部分。参拝者の礼拝する所。

《海老紅梁》
こうりょう

虹梁は、向拝で用いられる梁で弓形に反った梁を海老紅梁という。

《妻飾》つまかざり

切妻屋根、入母屋屋根の妻面の装飾のこと。

《妻面》つまめん

切妻やアーチなどの両端の三角形あるいは半円になった側面の側をあらわす。

5 愛宕神社

祭神（火産靈神）
ほむすびのかみ
伊邪那美神
いざなみのみこと

【歴史】

讃岐名勝図会に掲載された挿絵によると、この神社の裏側・北側に糸浜と呼ばれる海浜が広がっていました。現在はJR線が走っています。

江戸時代末期の城下絵図によると糸撚愛宕社とあり、北側が海



愛 宕 神 社

となっています。そこには糸浜と記されています。なお、同図によると蓮華寺に愛宕別当蓮花寺とあり、蓮華寺が愛宕社の別当寺であったことがわかります。

建治元年（1275年）野原郷の西浜城主の岡田丹後守清高によって、弓箭の神として創祀されました。後、糸浜の松林中の景勝地に鎮座する住吉神社の傍らに遷され、鎮火、尚武の神として近在の人々に敬われたと伝えられています。

文安年間（1444年～49年）岡田丹後守宗高によって神域が拡張され、元龜元年（1570年）には社殿が修築されたといわれています。

生駒氏は当社を祈願所とするともに、寛永16年（1639年）に社領を寄進しました。

高松松平家初代・頼重も厚く崇敬したそうです。

讃州府誌に「岡田丹後源清高居二香川郡坂田郷一弘安中建二鎧原西浜愛宕社一修二復王子権現一／弘安年間（1278年～88年）」とあって、上記との年代等は合致しないものの、

東隣の若一王子神社との関係を示峻しています。

愛宕神社の境内末社として住吉神社があります。もともとは住吉神社の鎮座する場所に愛宕神社が移ってきたとされています。住吉神社そのものは城下町の北西にあり、潮留の宮として藩主の崇敬が篤かったといわれています。

なお、住吉神社は表筒男命、うわつつおのみこと 中筒男命、なかつつおのみこと 底筒男命以外に大物主命、崇徳天皇、素盞之命、すさのおのみこと

を祭神としています。これは昭和4年（1929年）に境内末社として祀られていた八坂神社と琴平神社を合祀したためです。

【現況】

讃岐名勝図会に掲載された挿絵によると、この神社の裏側・北側に糸浜と呼ばれる海浜が広がっていました。現在は埋立が進んでおり、神社は海岸線から離れた場所に鎮座しています。

現在、北側にはＪＲ線が走っています。高松駅も近く、同駅が行き止まり構造になっている特殊な駅であることから、瀬戸大橋線、予讃線、土讃線、高德線の上り下り列車が神社の裏を駆け抜けています。四国島内に限れば、列車が一番多く通る線路となっています。西側には高松市の扇町公園があり、そしてその西側、さらには東から南には古い住宅地が広がっています。特に神社の南から西にかけての一带は、昭和二十年七月四日の高松大空襲による焼失を免れた城下町・木蔵町で、現在は地名とともにかなり変わっていますが、一部に名残を残しています。

東、正確に言えば東南東には、愛宕神社を創祀した岡田氏によって同じく創祀された若一王子神社が鎮座しています。また、線路を距てて北東にある蓮華



若一王子神社

寺も岡田氏との関係がいられています。中世，当社の鎮座地を含むあたりに，岡田を苗字とする有力氏族が勢力を振っていたようです。

【参考文献】

『弘憲寺の名宝展』

平成十年十一月発行 高松市歴史資料館

『創立百周年記念誌』

平成十三年十一月二十八日発行

高松市立二番丁小学校創立百周年記念実行委員会